



TITLE:

需要曲線、供給曲線、及び價格曲線(二、完)(附り、石川法學士の『正常需要供給の動的考察』に對する所見)

AUTHOR(S):

河上, 肇

CITATION:

河上, 肇. 需要曲線、供給曲線、及び價格曲線(二、完)(附り、石川法學士の『正常需要供給の動的考察』に對する所見). 經濟論叢 1921, 12(5): 695-716

ISSUE DATE:

1921-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127781>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第

卷二十第

行發日一月五年十正大

論叢

戰後に於ける獨逸の財産税を論ず……………法學博士 小川郷太郎
利潤配分實施上の諸問題……………法學博士 田島錦治
需要曲線供給曲線及び價格曲線……………法學博士 河上肇
戰後獨逸の社會主義運動……………法學博士 河田嗣郎

時論

税制整理の主要問題に就きて……………法學博士 神戸正雄

說苑

舊岩國藩の製紙原料保護政策……………經濟學士 吉川元光
我國在來の商業帳簿……………法學士 大森研造
所得と勞賃……………經濟學士 堀經夫

雜錄

Lexisの公共福祉觀……………法學博士 財部靜治
最近我國に於ける地方費の組成と増加……………經濟學士 小山田小七
國際勞働立法……………法學博士 河田嗣郎

需要曲線、供給曲線、及び價格曲線 (二、完)

(附り、石川法學士の『正常需要供給の動的考察』に對する所見)

河 上 肇

- 目次
- 一、普通に謂ふ所の需要曲線及び供給曲線 前號所載
 - 二、マアシナル等の所謂供給曲線と價格曲線 前號所載
 - 三、石川法學士の所謂需要曲線及び供給曲線 本號所載

三、石川法學士の所謂需要曲線及び供給曲線

石川法學士の『正常需要供給の動的考察と時の要素』と題する論文は、本誌第十二卷第一號に掲載されてあるが、其の論文に於て、學士が需要供給の動的考察と謂ふのは、¹⁾ 需要側の事情の變化と供給側の事情の變化との相關々係²⁾に就ての考察で、詳く言へば、『需要側の事情又は供給側の事情の一方に變化あり、從て需要又は供給の一方が變動する時、其變動はまた他の一方の事情に影響して、此ものをも變動せしむる』³⁾場合に就ての考察である。學士は之に對して、需要又は供給の一方が變動する時、他のものは之と同時に變動することなしと看做して、價格の決定を考察する場合を、其の靜的考察と稱して居られる。さて此の題目の下に學士の論せられ居る所を見

(1) 『經濟論叢』第十二卷第一號、本年一月發行 172-191頁
(2) 同上 174頁 (3) 同上 173頁

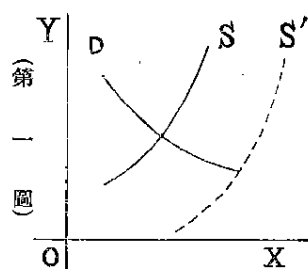
るに、その議論及び引例とも主としてマアシャルに據つたもので、それに對しては、私に敢て異論が在る譯ではない。只學士は『總ての説明に當り、之を解り易からしめんが爲に、圖形を並用せんと欲す』とて、需要曲線及び供給曲線なるものを隨所に使用して居られるが、此の如き圖解を試みた點が、學士の全く新たな企てに屬する。しかるに私の見る所によれば、その圖形の使用には、或る誤謬が潜在して居り、少くとも適當なる説明を缺くが爲めに不可解の點が澤山あつて、折角『解り易からしめんが爲に』採用された此等の圖形は、却て總ての説明を解り易からざるものと爲し了へてゐる、と思はれる。以下私の主として問題とする所は、圖形使用の當否に就いて、又つて、議論の内容の可否に就いては無い。尤も學士の議論の中には、學士の所謂動的考察と靜的考察との混同もあれば、又私の所謂可能的需要又は供給の變動と現實的需要又は供給の變動との混同もある、と思はれるので、事の序に其等をも指摘する積りではあるが、それは附隨の事柄で、本來私が問題としやうとしてゐる所は、曲線使用法の當否なのである。なほ其等の點については、當該論文の發表されし前と後とに於て、學士と私との間で度々意見の交換を試み、又經濟學會の例會に於ても既に回を重ねて互に意見を述べ合つて見たが、如何にしても意見の一致を見るに至らぬので、然らば試に思ふ所を筆記し見んとて、私は遂に此の論文の起草を思ひ立つた譯である。されば、書き上げた結果から言へば、學士の論文の批評は『附り』となつて仕舞つ

たけれども、その由來から言へば、この最後の學士の論文に對する批評が、本論の眼目なのである。私は茲に其の批評に入るの前、學士が興味ある論題を提供し私を刺戟して此の長篇を成すに至らしめられたことを、先づ感謝する者である。

私の議論の要點は、學士の論文に曲線使用法の誤謬がある、といふ主張である。私が再三學士の論文を熟讀して理解し得たりと信する所に依れば、學士自身が需要曲線又は供給曲線と稱して居らるゝものには、各々二種の別があるやうである。其の一は、私の言葉で言へば、同時存在の可能的事實を曲線に現はしたもので、其の二は、異時存在の繼起的事實を曲線に現はしたものである。従て前の曲線が使用してある場合には、需要なり供給なりの變動が、二個（又は其れ以上）の曲線を使用することによつて圖示されてあるが、後の曲線が使用してある場合には、其れが只一個の曲線の右方又は左方への延長によつて圖示されてある。しかるに、學士の論文には、此の如き二種の曲線の各々の意味又は性質に就て、何等の説明が施してないのみならず、同じやうに需要曲線又は供給曲線と命名されながら、其れに各々二種の別があると云ふことに就ての、單なる暗示さへ、何處にも與へられてゐなくて、しかも最初から一個の圖形の中に、供給については一方の性質を有する曲線を採用し、需要については他方の性質を有する曲線を使用して居られるの

で、讀者にとつては、其の圖解が殆ど不可解のものに爲つてゐるやうに思はれる。

私は先づ總論的に、學士の使用して居られる曲線が、極めて曖昧だといふことを、論證して見やう。之につき、第一に吟味すべき問題は、學士が其の使用する所の需要曲線及び供給曲線について、學士みづから之を如何に説明して居らるゝか、といふことである。幸にして學士は曲線の使用に先ち『余は以下總ての説明に當り……圖形を並用せんと欲するが故に、茲に一言之につき述べて置かんとす』と言つて、自己の使用する曲線の性質を次の如く説明して居らるゝ。それによると



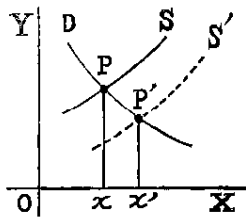
『需要及供給は價格の相連するに従つて相連し行く貨物の分量にして……此相異なる各の價格と其各の價格に對應する物量とを表に示せしものは、所謂需要又は供給の目録にして、また之を圖形を以て示めず時は、普通上圖に於けるS曲線又はD曲線の如く曲線を以て表はさるゝこととなる。……而して需要又は供給の變動とは、或需要又は供給の示す價格と物量の關係が、其總てを通じて變動することにして、即需要又は供給目録そのものが其全體に渡つて變ずることなり。故に需要又は供給の増加とは、總ての價格に於て需要又は供給せらるゝ物量の増大することにして、之を圖に表はせばS、又はD、曲線が右へ移動することなり。……需要又は供給の減少とは、之とは全く反對の變動なり。即圖につきて云へばD、又はS、曲線が左方へ移動することなり。』

此の一文には、需要曲線又は供給曲線といふ文字は使つてないけれども、所謂D曲線なるもの

が需要曲線であり、S 曲線なるものが供給曲線であることは、前後の文意で明かである。しかれば其等曲線の性質又は意味は如何といふに、學士の説明は甚だ不十分なるを免れぬと思ふ。蓋し OY 線を以て價格を示し、OX 線を以て貨物の分量を示すも、とするならば、そこに描かれた S 線なり D 線なりが、價格と貨物の分量との相關々係を示すと云ふことは、殆ど説明を要せざることであるが、しかし只それだけでは、其の關係は因果關係であるのか、或は其の他の關係であるのか、又因果關係であるとすれば、OY と OX と何れが原因であり何れが結果であるのか、詳しく言へば OY が原因で OX が結果であるのか、又は OX が原因で OY が結果であるのか、其等の點が總て明かにならぬので、從て曲線の性質又は意味が甚だ漠然たるものになるのである。尤も學士は此等曲線の説明に當り、『普通上圖に於ける云々』と言はれてゐるから、それは、學士が新たに特別の意味を附せられた曲線でなくて、普通のものだらう、とは想像される。ところが只普通のものと云ふだけでは、既に前節に於て委しく述べたやうに、學者によつて、此等曲線の意味が一少くとも供給曲線なるものゝ意味が一相違してゐるのだから、その何れを指すのかゞ矢張り明瞭にならぬけれども、しかし前に引用した學士の説明を見ると、學士は『需要又は供給の増加とは……之を圖に表らば S 又は D 線が右へ移動することなり、……需要又は供給の減少とは D 又は S 線が左方へ移動することなり』と明白に説明されてゐて、需要なり供給なりの變動を、

曲線そのものゝ移動(即ち二個又はそれ以上の曲線の使用)によつて圖示しやうとして居られるから、其等の曲線が同時存在の可能的事實を圖示してゐるものだ云ふことだけは、之を推定して敢て差支がなからうと思ふ。ところが、學士の論文を讀んで後の部分に至ると、需要曲線についても供給曲線についても、各々其れに前進曲線及び後退曲線の區別が設けられてゐる。何等適當の説明なしに、前に解釋されたる如き曲線が、『前進』又は『後退』の運動を開始すると云ふことは、讀者としては聊か迷はざるを得ざる出來事であるが、再三繰り返して學士の論文を熟讀する時は、吾々は、學士が此等の場合に、一個の曲線の右方又は左方への延長によつて、需要又は供給の變動を現はし、從て一個の曲線内に『時』の要素を包含せしむることにより、其の曲線を以て、異時存在の繼起的事實を圖示するものとされてゐることを、看取し得るに至るであらう。即ち其れは、學士によつて等しく需要曲線又は供給曲線の名を以て呼ばれてゐるけれども、實は前のものとは全く性質を異にした曲線なのである。少くとも、需要又は供給の變動を現はすに、曲線全體の地位の右方又は左方への移動を以てする場合と、(從て二個以上の曲線にて之を現はす場合と)、一個の曲線の右方又は左方への延長を以てする場合とは、其の意味が相違しなければならぬ筈であるが、此の如き圖形の使用に際し、學士は何等の説明を與へてゐないのである。學士の圖解が讀者にとつて殆ど不可解に終るのは、蓋し已むを得ざることであらう。

一般論としては以上の如く述べ得るが、私は以下更に、個々の場合につき、若干の批評を加へて見たいと思ふ。學士は問題を『需要につき』と『供給につき』とに分ち、更に(一)前者をば(A)供給が増大する際と(B)供給が減少する際とに分ち、(二)後者をば(A)需要の増大する際と(B)需要の減少する際とに分つて居られる。以下その一々の場合の圖形につき所見の一端を述べやう。



(第二圖)

(一)の(A)供給が増大する際に於ける需要曲線。私は、この標題の下に於ける學士の所説を批評する前、供給が増大する際には需要は如何なる變化を受くべきであるかを、先づ自分自身で考へて見たいと思ふ。今この問題を考へるについて、第一に能く區別して置かなければならぬことは、供給の増大に伴ふ所の單なる現實的需要の増加と、供給の増大に影響せられて起る所の可能的需要の増大(この場合には、前の場合よりも、當然より大なる現實的需要の増加が起る)との相違である。前の場合は茲に掲ぐる第二圖に相當するのであつて、此の場合には、需要に何等の變化なきに拘らず(即ち需要者側の事情には何等の變化なく、可能的需要の状態は元のまゝにて、之を圖形に就て言へば、D線の地位には何等の變化なきに拘らず)、供給の増大(即ち可能的供給の増大—之を圖に現せばS線が右方へ移動してS'と線

なること) ありたるが爲め、先づ價格が下落し (P が P' となり)、その結果、實際の需要額

が Ox より Ox' に増加したのである。即ち此の場合には、實際の需要額

(即ち現實的需要) は増加してゐるけれども、需要 (即ち可能的需要)

には何等の變化が起つてゐないのである。しかるに後の場合は、茲に掲

ぐる第三圖に相當するのであつて、此の場合には、先づ供給の増大 (即

ち S 線が右方へ移動して S' 線となる) があつて、その事が需要側の事情

に影響し、一定の時間を経た後に需要の増大 (即ち D 線も亦た右方へ移

動して D' 線となること) を見るに至つた爲め、實際の需要額も亦た、前

の場合よりも更に増加して Ox'' の大さとなつてゐるのである。前者は石

川學士 of 所謂靜的の場合に當り、後者は所謂動的の場合に當る。さうし

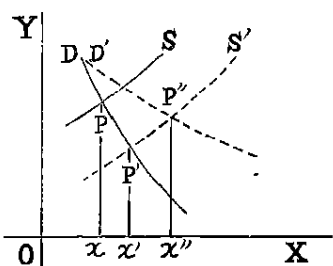
て價格曲線は、第四圖に於ける如く、前の場合には P, P' の形を取つて、

需要曲線 D と恰も合致するのであるが、後の場合には P, P' の形をとつて、

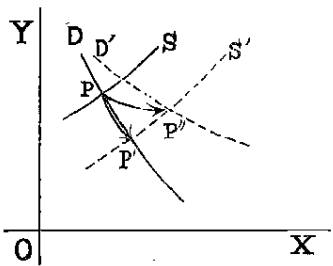
どの需要曲線又は供給曲線とも合致することは無い。なほ此の後の場合

には、先づ S 線が S' 線の地位に移動し、然る後その影響を受けて、若干

の時日の後に、 D 線が D' 線の地位に移動するのであるから、其の間に時



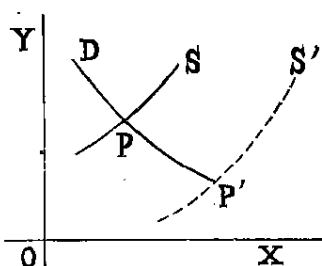
(第三圖)



(第四圖)

の經過を含むことは、言ふまでもない。

私は斯様に考へる。今それを石川學士の説明に對比するに、學士は此の後の動的の場合（即ち供給の増大のため需要も亦た増大するに至る場合）を、茲に轉寫せし如き圖形（第五圖⁶⁾）を以て現はして居られる。さうして供給の増大はS線がS'線に移動するといふ形で現し、其の影響のため



（第五圖）

の圖形（第五圖に轉寫）に於て、D線をばS'線に到着した點で切つて居らるゝことや、『供給の増大し行く際に之に伴ふ需要を表はす曲線』をば『需要の前進曲線』と呼び、之を『後退曲線』なるものと區別して居らるゝことなどに徴して、私は右様に解釋したのである。

さて此の解釋にして間違つてゐなければ、前記の圖形に於けるDなる需要曲線は、需要の増大

めに起る需要の増大（問題は學士の所謂動的考察の場合に拘るから、茲に需要の増大といふのは、所謂靜的考察の場合にも起り得る單なる需要量の増加でなしに、需要側の事情の變動に本づく可能的需要の増大を指してゐなくてはならぬ）をば、D線がP點からP'點に進むといふ形で現はして居られる。學士の説明には、此の場合の『需要の状態を圖に表はせば、D曲線の如くに右に進むに従ひて下に低り行く曲線、即消極曲線の形をとるなり』とあるだけで、意味が十分に解り兼ねるけれども、其

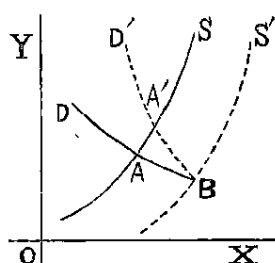
につれて『前進』する曲線なのだが、それは一應不可思議のことゝ謂はなければならぬ。何故といふに、學士自身が曲線の使用に先ち説明せられたる所によれば、『需要又は供給の増加とは、……之を圖に表はせば、S又はD曲線が右へ移動すること』であつて、現に上掲の圖に於ても、供給の増大は、S線が右方へ移動してS'線の形をとる、といふことにしてあるのに、獨り需要のみが只一個の曲線の延長によつて現はされてゐて、その曲線が或は前進し或は後退するといふやうなことは、其處に特別の説明の附せられあらざる限り、其れは如何なる意味であり、又如何なる理由でさうなるか、讀者にとつて全く理解し得べからざることだからである。然らば、學士がDなる線を以てPとP'をつないで居らるゝのは、全體如何なる意味であらうかと推測して見るに、それは私が第四圖にP'P''なる線を以て現はしてゐる所の、一の價格曲線に外ならざるもの、と見るの外はないのである。しかも學士が若し其れを以て、飽くまで一の需要曲線だと考へられるならば、それは私が既に前節で論じて置いたやうに、價格曲線なるものは、或る意味に於て、供給曲線であるとも、需要曲線であるとも、言ひ得らるゝと云ふ事實があるために、それに引掛かつて居られるのではないかと思ふ。

(一)のB)供給が減少する際に於ける需要曲線⁸⁾。此の標題の下に、學士は次の如き圖形と説明と

(8) 同上 177頁

(9) 同上 179頁以下

を掲げて居られる。



(第六圖)

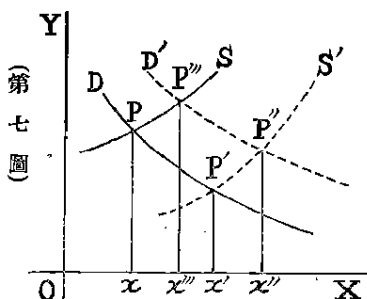
に於て變動を生ぜしなり。故に然る後に於て、其供給價格が再び以前の如くに騰貴するも、今は人々は以前の如くに其使用量を減少することなきなり。斯くて供給が増大し行く際に於ける需要の状態を表はせしD曲線は、供給が減少し行く際に於ける需要の状態を表はさずして、之よりも高きD'線が之を現はすこととなるなり。従つてまた價格も、以前のA點とは異なりて、A'點に於て定まることとなるなり。』¹⁾

以上學士の説明して居らるゝ場合を、私の言葉と圖形(第七圖)に翻譯して見ると、次の如く
 なると思ふ。供給が増大する時は(即ち可能的供給が増加して、第七圖に於けるが如く、S線が
 S'線の形を取るに至る時は)、すぐに價格が下がる(即ちPの高度のものがD'になる)。さうし
 て價格が下がつた爲めに、需要の状態には未だ何等の變化なき場合でも(即ちD線が元の状態を

『靜的考察に於ては、我々は供給の増大する際に於ける需要の状態を表はす需要曲線と、供給の減少する際に於ける需要曲線とは、何等相違なきものと考ふ。即ち上圖に於て云へば、供給がS線よりS'線に増加せし結果、需要量がA點よりB點に増加し、然る後に、供給が再びSよりSに減少する時には、之に伴ひて需要量は再びBよりAに減少するもの……と考ふ。然るに動的状態に於ては、供給が増大せし時に於ては需要側の事情に變化を生ずるを以て、之と全く異なる結果を生ずるなり。即ち……供給が一度増大し換言せば供給價格が一度下りて、人々が漸次其貨物の使用に慣れて需要量を充分に増大せし時に於ては、其貨物に對する人々の性質が變化せり、即ち需要側の事情

呈してゐる場合——從て學士の所謂靜的の場合でも)、實際の需要額(即ち現實的需要)は Ox より

Ox' に増加する。しかし一定の時日を経過すると、供給の増大の影響を受けて、需要側の事情に變動を起し、需要が増加することになる。

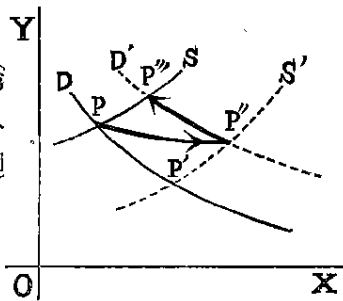


(第七圖)

は、學士の所謂供給の増加が需要の増加に及ぼす影響の動的考察の範圍に屬するので、既に一のAに於て取扱はれた所である。今一のBに於ける問題は、此の如き供給の増加、并に之に伴ふ需要の増加が起つた後に、供給が再び減少するに至る場合のことである。然らば其の場合は何うなるかと云ふに、供給が再び依然の狀態に歸復して、 S' 線が S 線の形を取ることになれば、價格は騰貴して $P''x''$ となり、需要額は減少して Ox'' となる。その意味に於て、需要(現實的需要)は減少する。しかし最初供給の増加に影響せられて一旦増加した需要(供給の増加に影響せられて變動を生じた需要側の事情、即ち D 線が D' 線の形を取るに至つたこと)は、急に變化するものでな

(即ち可能的需要が増加して、 D 線が D' 線の形を取るようになる。——さうなれば、それは已に、供給の増大が需要に及ぼす影響についての、所謂動的考察の場合に這入ることになる)。さうして既に需要が増加するならば、一旦 $P'x'$ まで下落した價格は、今度は騰貴して $P''x''$ となるけれども、實際の需要量は猶ほ増加して Ox' が Ox'' となる。こゝまで

いから、(即ち S' 線は S 線に復歸しても、 D' 線は依然現狀を維持し、急に D 線に復歸するものではないから)、此の場合、たとひ供給は元の狀態に復歸しても、需要量は最初の分量たる Ox にまで減退するものでは無くて、それよりもより、多い分量の Ox'' に止まる筈である。かくて價格決定點は、同じ曲線の D' 線の上を、 P'' から P''' に移る。學士が一の B に於て問題として居られるのは、此の最



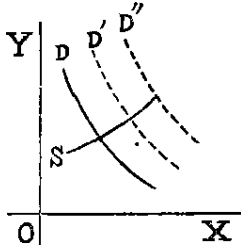
(第八圖)

て現はし、その中 D' 線を以て特に『後退曲線』と命名せられて居るが如きは、明かに曲線使用上の誤謬を含んでゐるのであつて、學士の所謂需要曲線(即ち第六圖の D 線及び D' 線)に當るものは、實は私が第八圖に矢にて方向づけた線を以て示してゐる所の、 P 、 P'' 及び P''' なる價格曲線でなければならぬと思ふ。

以上は供給の變動が需要に及ぼす影響に就ての考察であるが、以下述ぶる所は需要の供給に及ぼす影響に就てである。

(二のA) 需要の増大する際に於ける供給曲線。此の標題の下に、學士の論せられて居る所は、項が二つに分れて居る。

(一) 第一項は一般論とも稱し得べきもので、學士は之に關し次の如き圖形(第九圖、第十圖)と説明とを掲げて居られる。



(第九圖)

『需要曲線なるものは曩に考察せし如く常に同一性質の曲線即消極曲線の形をされども、供給曲線は之と異り、増大されたる需要の時間的性質により全く其曲線の性質を變動す……。即ち上圖に於て需要がDよりD'の方向へ増大したる時、其が短期間に於て供給に及ぼす影響は、右圖(第九圖)に於けるが如く供給曲線をして積極的曲線(即ち右に進むに従ひ上に上り行く曲線)の形を呈せしむ……。然るに此増大したる需要の性質にして長期間に渡りて繼續するものなる時には、正に反對に左圖(第十圖)に於けるが如く供給曲線をして消極的曲線の形を呈せしむることとなるなり』。

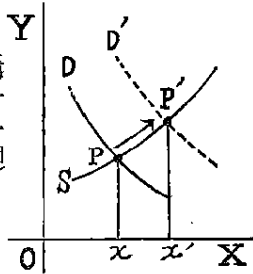


(第十圖)

しからば何故短期間の場合は供給曲線が所謂積極的曲線の形をとるかと言ふに、學士の説明によれば、急に需要増加の起りたる時、之に應じて供給を増加せんとすれば、短期間に於ては、之を如何なる貨物に就て言ふも、必ず其の一單位の生産費を増加することになるからである。『前掲の右圖(第九圖)につきて之を云へば、D'の需要に應ずる供給は、D'の需要に

應ずる供給よりも、其生産費大にして従て供給價格大なり、斯くて供給曲線は積極的の形を呈することとなるなり。⁽⁵⁾之と異り、需要の増加が長期に亘つて繼續され居るに於ては、『生産經濟の發達により其生産費は次第に小となる。而して其小となる割合は、持續せらるゝ需要が大にして従て供給の増大せらるゝ度合大なる程大なり。……之を前掲の左圖（第十圖）について云へば、持續せらるゝ需要がD'なる時はD'なる時よりも供給價格は一層小となり、斯くて供給曲線Sは短期の場合とは反對に消極的に傾くこととなる。』⁽⁶⁾

學士の説明せらるゝ所は以上の如くであるが、私は此の場合に於ても、矢張り曲線の混用が行はれてゐると思ふ。然らば前掲の圖は如何に書き改むべきものなるやと云ふに、第九圖は、その外



(第十一圖)

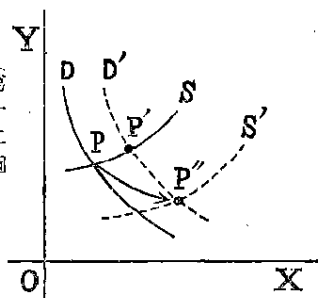
形から言へば、そのまゝで差支ないけれども、只その説明は若干の訂正を要すると思はれる。蓋し需要の増大が供給に及ぼす影響を短期間について觀察する場合は、需要の増大が供給側の事情に未だ甚しき變動を惹起すに到らざる場合であるから、その供給側の事情に變動が起らぬと云ふ點を少し強調して、假に何等の變動も起らぬものとして考へるならば、第十一圖に示す如く、需要曲線はDからD'に動いても、供給曲線は依然としてSなる形を維持して居ることになる。さて此の場合に、若しDがD'に移つたならば、その

(5) 同上 182頁
(6) 同上 182, 183頁

爲めに如何なる結果を生ずることになるかと言ふに、供給額は Ox から Ox' に増加するが、併し其の供給額の増加は、價格が Px より $P'x'$ に騰貴することによりて、實現せられ得るのである。

學士が此の場合について『需要の増大は價格の増大を來すこととなるなり』と言はれてゐるのは、即ち之を指したものである。さうして價格決定點の P と P' とを連結した PP' といふ曲線は、此の場合供給曲線の S と外形上一致することになるけれども、しかし其れは單なる外形上の一致であつて、是が爲めに、此の價格曲線を以て供給曲線なりと爲すは、明かに誤解だ、といふのが私の見方である。即ち學士が、短期の場合につき注意すべきことは、『供給曲線をして積極的曲線の形を呈せしむることなり』と言つて居られるのは、『此の場合價格曲線は積極的曲線の形を取るべし』と言ひ改むべきものであらう。既に前節に於て委しく論じたやうに、普通に謂ふ所の(即ちマアシャル等の謂ふ所と別の意味の)供給曲線ならば、特に説明するまでもなく、それは何時でも、左より右に上がるといふ積極的曲線の形をとるべきであつて、獨り此の場合に限つたことではないのである。

なほ此の價格曲線と供給曲線との區別は、所謂長期の場合に於て甚だ明白になる。所謂長期の場合は、供給の増加(即ち S 線が S' 線となる)につれ、やがて需要の増加(單に需要額が増加するといふだけの意味ではなく、可能的需要が増大するといふ意味だから、 D 線は D' 線の形をとる



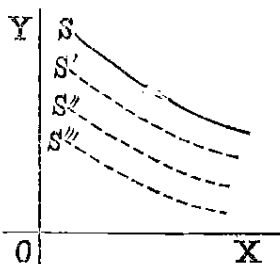
(第十二圖)

ことになる)が行はれるのだから、之を圖形に現はせば、第十二圖の如くなるべきであつて、即ち此の場合、價格曲線は $P'P''$ といふ形をとることになる。さうして此の $P'P''$ なる價格曲線については、次の二つのことが言へるのである。

第一に、それは短期の場合の價格曲線(第十二圖について言へば $P'P''$)と別の曲線になる。第二に、それは右に上がることも、右に下がることも、共に在り至るが、しかし短期の場合の價格曲線に比ぶれば、比較的、右下がりとなる。即ち $P'P''$ なる價格曲線は、必ず $P'P''$ なる價格曲線の下を這ふことになる。(それは S 線の地位が、後の場合には、前の場合に比し、より低い地位を占めてゐるからである)。私は斯う解釋する。さうして學士が、此の場合には『供給曲線をして極的曲線の形を呈せしむることなるなり』と言つて、 S なる供給曲線を右下がり^の形に現はして居られるのは、本來供給曲線と稱すべきものではなくて、私が $P'P''$ がなる曲線を以て現はしてゐる所の、價格曲線に外ならぬものと信ずる。

(二)需要増大の供給に及ぼす影響を短期と長期との二つの場合に分けて説明したる後、學士は更に長期の場合を分つて、供給の増加に伴ひ生産費遞減の行はるゝ場合と、生産費遞増の行はるゝ

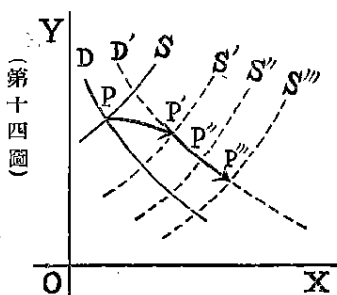
場合とにされてゐる。その中、生産費遞減の行はるゝ場合に對しては、左の如き圖形と説明とを加へて居らるゝ。



(第十三圖)

『供給曲線が長期に渡り消極的の形を現はすは、前述せし如く、増大されたる需要の性質が永續的のものなる時は、需要の増大に伴ひて増大されたる生産が永續し、之につれて供給の事情たる内外諸種の生産經濟が發達するが爲なり。されば其増大したる需要の性質にして永續的のものなる程生産の増大は永續し、從て其生産經濟は益々發達して生産費漸次に遞減し、從つて其供給價格が愈々低下し行くこととなるなり。即ち消極的の供給曲線は上の圖(第十三圖)に於けるが如く愈々低下し行くこととなるなり。』

學士は此の如く説明して居られる。しかるに私の見る所によれば、

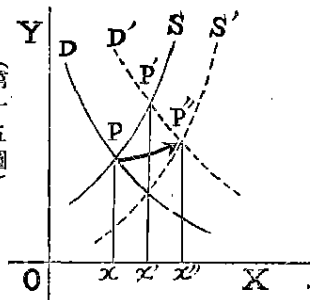


(第十四圖)

此の場合は先づ需要の増加あり、從て第十四圖について言へば、D線がD'線の形を取るに至り、然る後時日を経るに從つて次第に供給の増加あり、從てS線はS'線の形を取り、更にS''線線S'''等の形を取るに至れるが爲め、價格も亦たそれに伴うて下落し、從て價格決定點は先づPよりP'に、次いでP'', P'''等に移動するといふ譯なのである。だから此の場合のS線(供給曲線)は、總て他の場合に於けると同じやうに、さうして學士の描かれて居るのとは逆に、右より左に下がる曲線の形を取るべきであつて、之と

異り、供給の増加に伴ひ次第に右に下がり行くは、 P 、 P' 、 P'' 、 P''' 等の諸點を結合することより成る所の價格曲線なのである。即ち學士が供給の増加に伴ひ『消極的の供給曲線は愈々低下して行くなり』と言つて、數個の曲線を下へへと描き現はして居られるのは、次第に右に下がる所の一個の價格曲線によつて代位さるべきものであらう。

(三) 次は供給の増加に伴うて生産費遞増の行はるゝ場合であるが、私の考によれば、此の場合には次の如く説明すべきものであると思ふ。即ち第十五圖に於て、需要曲線が D より D' に移動してゐるの



(第十五圖)

けれども(S 線は元のまゝだけれども)、價格騰貴のために供給額は増加する(Ox が Ox' となる)のである。しかるに之を長期間について觀察すれば、需要の増加、價格の騰貴が誘因となつて、一定の時期を経ると、供給側の事情に變動が起り、供給曲線の S が S' の形を取るようになる。即

るのは、需要側の事情が變動(需要が増加)してゐることを示す。さて

此の如き需要の増加行はれたる時、之を短期間について觀察すれば、その需要側の事情の變動に應じて直ちに供給側の事情に變動を惹き起すことは通常不可能であるから、供給曲線の S は依然として原狀のまゝに残る。従て價格は Px から $P'x'$ に高まり、それと同時に供給額(從て需要額)は Ox から Ox' に増加する。即ち所謂供給には變動がない

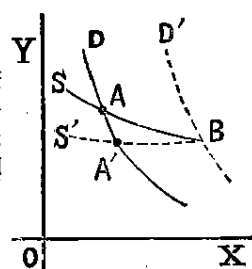
ち供給の増加が起るのである。さうすると、價格は $P'x$ から $P''x$ に下落することになるが、それと同時に、需要額は更に増加して、 Ox' は Ox'' となる。故に短期間に於ける價格の變動を現はす所の $P'P''$ なる價格曲線に比ぶれば、長期間に於ける價格の變動を現はす所の $P'P''$ なる價格曲線の方が、右に下がることになる。——こゝまでの所は、生産費遞減の場合に述べた所と全く同じことである。——しかしながら、今問題としてゐる場合は、供給の増加に伴うて生産費遞増の行はるゝ場合であるから、 $P'P''$ といふ長期の場合の價格曲線は、 $P'P'$ といふ短期の場合の價格曲線に比較すればこそ、右に下がることになるのだけれども、曲線そのものは飽くまで左より右に上がる形を取るべきである。しかし、飽くまで右に上がる形を取りながらも、期間が長きに亘り、從て生産經濟が發達すればするほど、その上がり方は益々緩慢となるべきである。私は此の如く考へる。然るに學士が此の場合の説明に當り、『其供給曲線は長期にありても短期に於けると同く積極的に傾く』³⁾けれども、『其長期間に於ける供給曲線は、積極的の形をとりながら、而も漸次に低下し行く傾向を有す』⁹⁾と言つて居られるのは、矢張り供給曲線のことではなくて、私の今説明した價格曲線に該當するものだらうと考へる。

(二のB)需要の減少する際に於ける供給曲線。最後に、學士が此の標題の下に説明して居られ

8) 同上 185頁

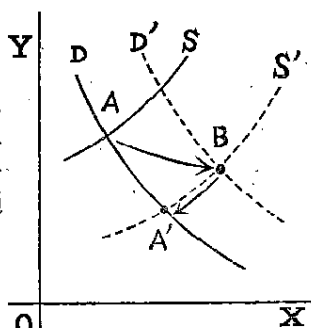
9) 同上 186頁

る所は、一旦需要が増加し、それから時を経て、供給側の事情が變動した後に、需要が減少する



(第十六圖)

場合の研究である。學士は其れをば、第十六圖に於けるS及びS'といふ供給曲線で現はし、S線は右に前進してB點に止まり、S'線はBから出發してA'の方向へ後退するものと看做し、且つB點を以て需要の増加に伴ひ供給側の事情の變動したる場合の價格決定點となし、A'點を以て需要が以前の狀態に減少したる場合の價格決定點とされてゐるのである。しかるに私の見る所によれば、此の場合には、正しくは第十七圖の如く現はすべきものである。即ちD'線上に於けるB點は、S'線との交叉によつて決せらるゝのであり、(此の場合には需要の増加につれて供給側の事情の變動せしことを示す)、D'線上に於けるA'點は、同じS'線と元のD線との交叉によつて決せらるゝのであつて、(此の場合には供給側の事情變動せし後に、需要は元の狀態に復歸せしことを示す)、從て學士が第十六圖に於てSといふ供給曲線を以てAとBとを連結されてゐるのは、私が第十七圖に於て矢にて方向



(第十七圖)

づけた曲線を以て現はす所の、A Bといふ價格曲線に該當するものであり、又學士がS'といふ供給

1) 原圖は同上186頁に出づ

曲線を以てBとA'とを連結されてゐるのは、私が同じく矢にて方向づけた曲線を以て現はす所の、B'A'といふ價格曲線(此の場合には恰もS'線と合致する)に該當するものである。しかし此の場合に於ける見解の相違も、既に述べた各種の場合に於ける見解の相違と、要するに同じ種類のものであるから、一々繰返す必要もあるまいと思つて、煩雜を避くる爲めに、之が説明は省略に附して置く。

之を要するに、學士の論文中に於ける曲線の使用は、從來未だ十分に行はれ居らざりし範圍にまで、價格變動の圖解を推し及ぼさんとした、一つの新しい試みであつて、其の點に於て吾々を利益された所は少くないけれども、しかし其の曲線の使用には、誤謬又は混雜又は不用意とも謂ふべきものが多量に含まれてゐる、といふのが、私の主張の要點なのである。(三月四日脱稿)